

## 私が耳になる

湯浅 均

私は今、東京のと真ん中を走っている。沿道には幾重にも人垣が出来ていて、ランナーに向けて大声援を送ってくれているが、私にはその殆どが聞こえない。しかしその雰囲気になれる幸せを感じている。やがて家族と応援の約束をした芝公園が近付いてきた。

私は若い時の事故で難聴になったが、聞き取れない場合は二度聞きするなどして何とか過ごしてきた。しかし、定年を数年後にして、日常生活にも支障が出るようになった。補聴器専門店と相談し、勧められる機器は全て試したけれど、聞こえは悪くなる一方だった。当然、仕事にも支障をきたし出した。特に会社の仕事仲間に迷惑をかけることが多くなり、会社を辞めるべきか一人で悩んでいた。また、仕事に対する未練もあった。思い詰めると夜も寝られない日が

それは大塩がそれまでに行ってきた奉行所における正義感に溢れる裁きや、民衆を思う数々の善行を十分に承知していたからであると言われていました。

要は大塩が民衆を救う為に元役人の立場を顧みず死を覚悟して敢然と幕府に立ち向かった事に幕府嫌いの大坂の町人は「拍手喝采」をしたのでありましょう。

徳川家康は生前に「幕府の敵は西からやってくる！」と恐れていた由であるが、まさしく大塩がその引き金を引いたと言えるのではないのでしょうか。

続き、体調も崩した。

ある日、夜中にうなされていたところ、妻が「どうしたの。」と聞いてきた。私は心配をかけたくなくて、それまで話をしていなかったが、こらえきれなくなって事情を説明した。

妻は「そうではないかと思っていたのよ。会社は辞めていいのよ。私はあんたが健康でいてくれるのが一番嬉しいのだから。」

そして「今まで苦勞してきたのだから、残りの人生好きなことをしたら。辞めたらこれからは私が耳になってあげるから。」とニッコリ微笑んだ。

私は途端に今までの苦しみが一瞬のように消え、スウーと肩の荷が下りた。やはり長年連れ合った伴侶に勝るものはない。ほどなく私は退職願を提出した。

東京タワーの側を通り過ぎると、ひととき歓声が高まった気がした。大勢の群衆の中に、妻や娘夫婦、孫の姿を見つけた。皆満面の笑顔で手を振ってくれている。私は近づくにつれて、見慣れた顔の一つ一つが滲んでくるのを止められなかった。

